
土と火の戦士

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

土と火の戦士

【Nコード】

N0090Z

【作者名】

フェニックス

【あらすじ】

ウエストホース。ならず者の住みか。その大陸に保安所があった。保安官レオ・バレッタは幾多の試練を乗り越え、極悪人、シヨットガンナーにたどり着いた。

土と火の戦士

レオ・バレッタはチャंकと同化し、アーマードバレッタとなりマリアが覚醒させたショットガンを背負い、飛び立っていた。

「あれは。アインシャーク三世。聖騎士ロキ。彼等も来ていたか？チャंक。合流しよう」「オーイ！待ってくれ！アインシャーク」

「フン。ゴッドインパルス。彼も来たぞ。あの姿で。アーマードバレッタ」「土の神ライダーの後継者、バレッタ。さすがだ。精神が充実している。初めて会った時と違うな」「オオ。あの気迫、気高さ。彼も覚醒したか。遅れを取るな！ロキ」「ゴッドインパルス。人は絶望の沼に浸かる時がある。それが仲間の死だったり、守るべき絆だったりする。沼は底なしだ。だが、そこから這い上がって来た蝶は美しい。なぜかわかるか？それが生命の可能性だからだ」「可能性か？強く舞うのも底で溺れるのも可能性か？」「その通りだ」

ロキとゴッドインパルスはレオと合流した。

「アインシャーク。いや、ロキ。遅くなったな。もう大丈夫だ。俺とチャंक。それにマリアとミサトの魂を引き受けた者、アーマー

ドバレッタ。これより貴公等に加勢する。遅くなったな。もう大丈夫だ」「なるほど。絆か？お前を再び舞い上がらせた原動力は」「そうだ。そいつは？」「紹介しよう。火の神の遣いアドニス。それが死を越える存在、死超星の宝珠と出逢い覚醒した。彼はゴッドインパルス。神の衝撃。正義の刃」「ゴッドインパルスか。良い名だ。行こう。奴を倒しに。ショットガンナーを倒しに」

三人は盗賊団のアジトへ向かった。保安所のボスはその光景を見ていた。「見ているか？マリア、ミサト。彼等が奴の元へ向かった。レオはすっかり遅しく産まれ変わった。君達のお陰かな？」ボスは暑い陽射しを見上げながら煙草に火をつけた。

「出てこい！ショットガンナー！俺は戻ってきたぞ！お前と決着を着ける為に！」「ホウ。負け犬が！随分な威勢だな。返してもらうぞ。俺の武器、ショットガン！三年前の屈辱を付けて！」「ショットガンナー！お前は黄泉の掟を破った。地獄すら温いわ！お前の行く先は、無限の闇。闇の森でさ迷うが良い」「ゴッドインパルスが二刀流を構えた。「邪魔するぞ。ショットガンナー。レオ。気のすむまでやれ！俺達は目撃者になるう」ロキがゴッドインパルスの前に立ち、レオの道を開けた。「レオ・バレッタ。復活の祝いだ。受け取れ」「ゴッドインパルスは二刀流で結界を作り、ショットガンナーの魔力を中和した。「コッ……………これは？なんとゆう事だ！我輩の力が中和されていく。貴様は？」「死超星の力。知っているだろっ？お前の通った道だ。お前は三年前死んだ。レオ・バレッタの

力に敗れた。その時、霸王、仁王と出会ったな。彼等にもらい受けた。彼等からの警告を伝える。ショットガンナー。お前はここで終われ。以上だ。さあ始めようか？」

ショットガンナーの兄、トップガンナーはその光景を見ていた。

「あの器も限界か。棄てよう。奴の敗けだ。改造人間ROUSE隊の隊長か。脆き器よのう。人智を越えた存在とは人体実験の結果では無いのか？」

続く

土と火の戦士 その2

レオ・バレッタは再びショットガンナーの前に立ちふさがった。

その頃、上層部も出撃の仕度をしていた。

「良いか。今回の任務はショットガンナーの始末。そして改造人間の始末だ。その為なら手段を選ばない。必ず始末するのだ。生かしておけばいずれ我々の障害になる。ここで始末するのだ」「元老院様。もし今回の任務で失敗したら……」「その時はこの兵器がある。良い実験になるのだよ」「左様ですか？ですがあの兵器はまだ研究段階です。まさか大陸の生態系を変える生態兵器など……」「……最終的な判断はワシがする。まずはどこまで押さえられるかだ。判断はそれからでも遅くはない」

「レオ。1つわからない事がある。教えてはくれないか？なぜ人間はもろい？」「もろい？いや、違うな！お前は知らないだろうが弱き者だからこそ可能性があるのだ。可能性があるから寄せ集まるのだ！それがわからんお前は既に終わっている。三途の川の渡し賃程度に教えてやるさ」「ホウ。可能性な。面白い。人の可能性など雨水にも足らん事を教えてやろうではないか？」

ショットガンナーの気迫が上がる。森がざわめき鳥は飛び立つ。その合間を縫ってレオは飛び上がる。鳥を踏み台にし、高く舞い上がった。

ガツシユツと音を立て、レオの両肩のバズーカーがターゲットを狙う。

「ウン。安定している。その調子だ。レオ」レオと融合したチャンクが彼の精神で語りかける。「チャンク！火を放て！」「ヨッシャー！イッタレー！」

ズバーン！

大陸を揺らす様な衝撃が走る。

「なんて衝撃だ！アドニス。大丈夫か？」「アア。なんとかかな。殺ったか？」「いや、爆風でわからない」

ショットガンナーは銃弾を手のひらで止めていた。そのままクルツと飛び乗り銃弾をかけ上がる。空中でレオを追いかける二人はクロス

する。

「さすがだな。我輩が認めた男はそうでなくてはな。今の攻撃でわかったさ」「死を飲み込んだ男の力だ！お前にはわからんだろう」「ホウ。死線を越えた力か？なら我輩も見せなくてはいかな。シヨットガンナー！オーバーデッドモード！」

鈍く緑に輝くシヨットガンナーは既に人の姿ではなく獣の姿だった。腕に二本の爪を持ち、狼の様な顔立ち。筋肉は躍動し、トゲの様な鱗を背負った男。

「ガウルルウツ！これが俺の姿だ！見せたのはお前が初めてだがな。正直恐いよ。初めての实战でね。さあ、始めようか。盟友よ」「ちようど良い。そうでなくてはな。人間のお前とは既に決しているのだ。三年前のマリアが死んだあの日」

二人は宙を飛びながら会話した。

「元老院様！空をご覧ください」「なんだ？あの野獣は？それにあの男。何者なんだ？」「奴はレオ・バレッタ。この大陸の保安官です」「……………と言う事は、一緒にいる奴が……………」「おそらく……………シヨットガンナー。常人に出来る業ではありません」

「レオ。少し腕試しがしたい。良い実験体がいる。待っている。邪魔者を蹴散らしに行く」「止める！ショットガンナー！これ以上被害者を出すな！」ショットガンナーはレオの話を聴かず上層部に襲いかかる。

グオラアウ！

大きく泣き叫び腕を伸ばす。彼の腕に触れた兵士が次々に倒れていく。腕を元に戻し、倒れた兵士の血を舐める。「ヒッ……………ヒ……………打て！ウテーイ！」ズガガガガッ。兵士たちは拳銃を構える体にめり込んだ銃弾を弾き返すショットガンナー。再び倒れていく兵士。「ヒッ……………ヒ……………引け！ヒケーイ！全軍後退！」

ガウルルウッ！

超人的な跳躍力で跳ね上がり、爪で貫くショットガンナー。

「ザット200。そんなもんか？弱き者よ。立ち去るが良い。今な

ら伝えられる。我輩の力を！」

「なんという惨劇。一瞬で上層部を蹴散らしやがった。奴は進化している。三年前より」「レオ！しっかりしろ！お前には絆がある！仲間達の。散っていった戦友の！」

「ウオーミングアップは充分だ。さあ、行こうか？レオ君。俺達の次元へ」

「元老院様！ご報告致します」「しなくて良い！クッ……………完敗だ。我々が甘かった。奴は既に人間を越えている。後は……………この大陸ごと爆破するだけだ。任務失敗」「元老院様。ご決断を」「サテライトの使用を許可する。生態系を完全消滅させる生物兵器サテライト。今すぐ発射準備を」「ですが元老院様。あれは開発途中で……………」「良いんだ！責任は私が取る！ここで食い止めるのだ！」「……………かしこまりました」

続く

土と火の戦士 その3

ショットガンナーは上空のレオ・バレッタを見上げる。「さあ、邪魔者は去ったぞ。始めようか？レオ君」「キツサマー！なぜ上層部の兵士を蹴散らした！関係ないはずだ！」「ちよつとした模範演技ですよ。人間に悪夢を見せただけです。喜んで頂けましたかね？」
「クツ…… ショット！貴様だけは許さん！行くぞ！」レオは背中
のショットガンを引き抜いた。「マリア。俺達に力を！ウォー！」
「待て！レオ！落ち着くんだ！」チャンクはレオの精神に呼びかけた。「止めるな！チャンク！俺は初めて殺めたいと思った！奴をこの手で！止めるな！」レオはショットガンを撃ち抜いた。

「ダメ！ダメだよレオ。理性を無くしたら奴と互角に渡り合えるのかい？そんな事をしたら終わった頃にはあんたは悪魔だよ。アタイが覚醒させた力はそうじゃない！あんたを悪魔に仕立てる為に戻って来たんじゃないよ！」ショットガンが語りかける。

「マリア…… チャンク…… そうだったな。俺は一人じゃ無い。奴の挑発に乗ってしまった。…… 危うく奴の手玉に乗る所だった。寸前で引き留めた。これが今の俺の力」レオは引き金から指を外した。

「スキあり！覚悟だ！レオ！」ショットが腕を伸ばす。紙一重でかわし、腕を取り、宙に投げる。崖に投げ飛ばされるショット。

ガラガラガラッ

地に膝を着くショット。「去った者の恨みにしては釣が来る程度だ。ショット」「チツチツチツ。違うな。連中は我輩の力に負けたのだ。果たし合いの世界では去って当然であろう。さて、ギアをトップに入れるかな」ショットは立ち上がり残像を残しレオの前に立った。「ハッ……………速い。一瞬で上空へ。見えなかった」

腕をダラリと垂らし舌を舐める。

ヒュンヒュンヒュン

鞭の様にしならせて腕を振る。「くらえ！獣皇列拳！」

「グフツ……………なんてスピードだ！」「捕らえた！終わりだ！レオ！」腕を伸ばし、羽交い締めにし、レオを締め上げる。「くらえ！獣皇電撃甲」激しいスパークと共に腕が光る。

「ウッグアー……………キッ……………動けない。力が。俺の絆が……………」
「苦しむレオ。」

「知ってるさ。お前の力の正体。絆。お前とチャंकが融合した事も。引き剥がしてやろう」ぐったりするレオの喉に手をかざしチャंकを呼ぶ。「出てこい！チャंक！融合を解くんだ！さもなくば……………」
「……………わかった。融合を解こう。シヨット」レオ・バレッタの融合が解かれる。

「フン。悲しい定めだな。レオ・バレッタ。再び仲間を亡くすとは」シヨットの腕が槍に変化しチャंकに襲いかかる。「獣皇手刀！」
「グハッ……………レッ……………レオ。レオー！」チャंकは妖火に焼かれ亡くなった。「アッ……………カッカッカツ……………チャंक。チャーंक！」地面を叩き悔しがるレオ。「強くなる過ぎるのもつまらんな。もうお前はリンクアップは出来ん。その力是我輩が殺めた。さあ返して貰おうか。三年前に我輩から奪ったシヨットガン」
「キッ……………貴様はまだ知らない事がある。絆とは出会い、いずれ別れる物だ。別れた後も残る証し。それが絆だ！」レオは立ち上がりシヨットガンナーを睨んだ。「なぜだね？なぜ立ち上がる？頭が悪いのかね？」
「違う！仲間がいるからだ！信じている奴等がいるからだ！」

「よくぞ言ったな。レオ。そうだ。どんな苦痛も仲間と分け合えば良い。どんな力も。絆の前では無力なのだ」「チャンク。お前……」「言ったはずだ。俺はお前と同化すると」「そうね。アタイ等が待つてるんだ」「このバカッ！あんたは一人じゃ無いんだよ！」「チャンク、マリアさん、ミサト。俺の精神で呼びかけている。力がみなぎる。ウォーッ！」レオ・バレッタは光に包まれた。

「バツ馬鹿な！あれはリンクアップの光。奴とチャンクが融合するときの。まさか……」「……ショットガンナー！俺も進化した。新しい形に。リンクアップは俺の想い。どんな時も一緒にいると覚悟した力。これで互角に渡り合える。チャンクが、マリアが、ミサトが、気付かせてくれた大切な宝物。これが生命の可能性だ！行くぞ！レオ・バレッタ。ファイナルフュージョン！」

赤いオーラの漆黒の男。レオ・バレッタ。彼の最終決戦は絆の力で幕を開けた。

続く

土と火の戦士 その4

赤いオーラの漆黒の男。レオ・バレッタ。彼はこれが最後の戦いと決めていた。仲間の絆と共に終わらせると。

「行くぞ！ショットガンナー！」背中 of ショットガンを構える。

バシュッ！

実弾と共にマリアが飛びかかる。「ウツゲッ……… なんという事だ！実弾に死者が！……… 馬鹿な！」「ショットガンナー！あんたはやり過ぎた！」レオはショットガンを置き、腰の二丁拳銃を構える。「マリア、チャंक、ミサト！もう迷わない！君達が切り開いた道。必ずたどり着いてみせる！どんな勝てない戦でも。俺にはお前たちがいる」

ズババーン！

腕をクロスし、引き金を引く。ショットガンの弾丸とリンクする。

「受け止めてみせる！貴様らの絆とやら。負け犬の悪あがきなど、

「しゃらくさいわい！」マリアの実弾を抱えるショットガンナー。「返り討ちにしてくれるわい！ソウリヤー！」力で実弾を弾き返す。

ズガガガガッーン！

上空で破裂する実弾。激しい衝撃と爆風が襲いかかる。煙の中、二人は拳を合わせる。お互い力は互角。張り合う二人に何人も介入する隙は無かった。

「アドニス。あいつら……」「アア。お互いに覚悟している。次元が違いすぎる」「覚悟？って事はレオは？土の神ライダーの後継者は？」「惜しい男だ。まだわからないがな」

「元老院様。サテライトの支度が出来ました」「待て！あの男。ひよっとしたら出番は無いかも知れんぞ。一応、支度だけはしておけ。残りの戦力も全面的にレオ・バレッタのバックアップを」「……………もう既に向かっています。仲間の仇を撃てと」「……………そうか。なら良い」

頼んだぞレオ・バレッタ。何も出来ない上層部だが、期待している。君らの勝利を。我々に使わせないでくれ。サテライトを。生態系破壊兵器を。

レオとショットは殴りあう。「フッ。やるな。さすが背負う者だな。このままでは決着はつかん」「ショット。今、わかった。お前も覚悟を決めているな。俺と心中すると」「心？そんなやわなもの、とうに捨ててるわい！人間は感情があるから次のステージに上がれないのだ。進化できないのだ！」「違うな！心は尊い。唯一無人の力だ！それがわからんのか！見てみる！連中が駆けつけた。お前がやり過ぎた兵士達が。俺達の絆に共鳴した。証明してみろ！」「ナツ…………馬鹿な…………お前たちでは勝てないのがわからんのか？レオつくづく人間とは愚かな生き物だな」

生き残った兵士達がレオに加勢する。

「レオ・バレッタ！受け取れ！我々の絆を！亡くなった戦友も加勢させてもらうぞ」「お前たち……………わかった。その魂、俺が引き受ける」レオの力がみなぎる。「ショット！覚悟！」「グッフッ…………馬鹿な！力が上がっている」「当たり前だ！マリア、チャンク、ミサトを引き受けた俺が第二形態。上層部の兵士の魂を引き受けた俺は第三形態！つまり立場も地位もしがらみも、なにもかも越

えた俺こそが究極なのだ！」「チツ……………貴様あー。何が第三形態だ！寄せ集めの弱者どもが！許さん！悪あがきもたいがいにせい！」「この力でお前を葬る！」「クツ……………バツクを取られた。なんて早さだ！貴様！何を？」「終わりだ！ショットガンナー！翔竜飛翔拳！」レオ・バレッタはショットガンナーを抱えたまま飛び上がった。摩擦熱で光の矢になる。「止める！燃え尽きるぞ！離せ！」「離さない！貴様を葬るまで。燃え尽きてやる！」仲間の絆が帯になりレオに加勢する。「これが、生命の可能性か？見事だ。レオ・バレッタ。できればもう一度会いたかった。次は仲間として。お前のサポートとして。最後に教えてくれないか？お前は私をどう思っていたか」「お前は俺とは違う。違いすぎる。力を求め、生命を愚弄し、黄泉の掟も破った。人間は器の中でしか生きられない。その器が尊いんだ」「そうか。レオ。次に産まれる時も人間で産まれたいか？」「お前が産まれ変わるならな。どこまでも追いかけてやるさ」「俺もだ。レオ。すまん。辛い想いをさせてしまつて。これからは皆で仲良く暮らしてくれ。さらばだ」ショットガンナーはレオの腕を振りほどき天高く昇って行く。

「アドニス。彼らが翔竜に……………」「アインシャーク。既に決着は着いた。土の神ライダーは翔竜になったのだ。美しい翔竜に……………さらばだ我が戦友よ」

「元老院様。ご覧ください。空に輝く翔竜を」「終わった。サテライトを使わずに。レオ・バレッタ。我々は忘れない。君達が切り開いた道を。この、ウエストホース大陸に永遠に輝くだろう」兵士達

が上空を見上げる中、レオ・バレッタとショットガンナーは永遠の旅に出た。彼らの行き先は、黄泉の世界か、精神の世界か誰も知らなかった。唯一、亡くなった戦友達だけが知っていた。

「レオ！早く起きんか！」「ン？……………チャंक、マリアさん、ミサト？……………ここは？」「寝過ぎだよ！アンタ！あれから一月もたってるのにさ」「一月？ここは何処だ？」「黄泉の世界だよ！いつまで寝ぼけてるんだい？」「そうか……………アッそうだ！ショットガンナーは？」「知らないよ！黄泉の世界を破門になった人間なんて」「そうか……………ようやくゆっくり出来そうだな」「レオ、ありがとな。奴を始末してくれて」「チャंक。お前らのお陰だよ」「レオ。黄泉の王が呼んでいる。俺達に勲章を頂けるそうだ。飯も出るそうだが。祝賀会だ。先に行くぞ」「そうか。すぐに行くよ」

四人は黄泉の世界で暮らしたらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0090z/>

土と火の戦士

2011年12月3日15時52分発行